

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石 『道草』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

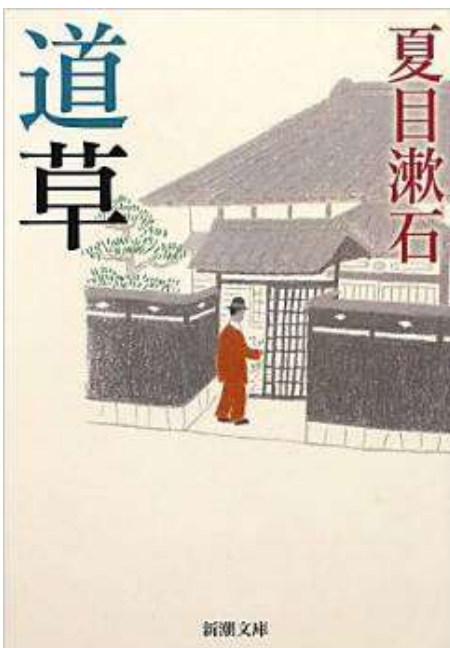
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 74 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石 『道草』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『絆の明暗』

「道草」という言葉は馬が道中で草を食い始めて、時間を費やす羽目になったところから来たという。日本語を勉強していた頃、「道草食うなよ」と言われてきよんとしていた覚えがあるので、このタイトルは非常に自分の興味をそそった。

漱石先生の作品を読むたびに感じるのは、自然と心が和んできて、のびやかな気分になるということだ。特にこの「道草」という作品は名前通り、他の作品よりいっそうのんびりしたテンポで綴られている気がした。最初から最後までお金の話ではあったが、そういう人間社会のややこしい部分を淡々と書き留めてみせる作者のすごさが感じられる作品だった。

義父をはじめとする色々な人物からお金を貸してほしいとせがまれ続ける健三。内心では好ましく思っていないのに、結局お金を貸してしまうという気持ちはなんとかわかる気がする。絆は絆(ほど)し、という言葉に限るというか、誰かと結んだ、あるいは結ばれてしまった縁を潔く断ち切ることは容易ではない。共依存とまでは言わなくとも、誰かと長い間付き合っていると、その関係性の境目が妙に癒着し始めて深い「愛憎」が生まれることとなる。健三と義父、健三とお住と関係が正にそうだと思った。

関係を断ち切るとは、かさぶたをとることと似ている。痛みと解放感を伴う不思議な感覚。でもその後ちゃんとした管理をしないと傷はより深まってしまう。でもそれを恐れて何もしないと、傷口は爛れるばかりである。

大事なのは、関係性において受け身にならないのではないだろうか。健三が自分から義父にお金を貸してあげることになったら、その関係性が少しは変わったのかもしれない。関係の道草を食わないことを心掛けたい。

(おわり)

スミカズさんのツイキャスです。 <https://ssl.twitcasting.tv/c:nindaranna>

『お前は誰の子だい？』

健三と夏目漱石はもちろん全く同じでは無いと思うし、健三はお話の中の人物だから実際とは違うと思いますが、もし夏目漱石がひねくれた人だとしても仕方がないなと思いました。

子供は自分の意思で養子に行ったりしないし、産んでくれた親に愛されたい気持ちを持つのは当たり前なのに、養父母からの愛情も受けられてなくて可哀想に思いました。

実際には、少しは愛情はあったかもしれないけど子供の時は全てが正しく伝わる事は難しく、時には間違っただけに捉えてしまうこともあるなと思うからです。

子供の時の記憶は曖昧な時もあり、しかも嫌な思い出は良い思い出と同じくらいかそれ以上に深く心に残って幾つになっても消えないでいるから、きっと『道草』を書かずにはいられなかったのかな？と思いました。

私が一番切なかったのは

(引用はじめ)

『健坊、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御云い』

(引用おわり)

親の期待している答えを言わなきゃならないけど、言いたくない気持ちの辛さが伝わってきて酷いと思いました。

そんな酷い養父母なら、関係を断ち切ってしまうても世間からも不義理だと言われなくてもいいけれど、煩わしくてもそういう関係を断ち切らない生き方の方が完全に断ち切った生活よりも人間らしく生きられるということなのかな？と勝手にそう思いました。

(おわり)

漱石の細君。

忙しい毎日。雨は降る。会いたくなかった男の登場。話の前半は、じめじめとした暗い空気がある。

それに対して、中盤から徐々に漱石らしいシニカルなジョークや行き違いばかりの夫婦の会話もだんだんくすくすと笑えてくる。

明け方の陽が昇ってゆくように仄かに明るくなって終わる。陰から陽へのきっかけはこの部分に感じた。

(引用はじめ)

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなくなった。然し今から金持になるのは迂闊な彼に取っても遅かった。偉くなろうとすれば又色々な塵勞が邪魔をした。その塵勞の種をよくよく調べて見ると、矢張り金のないのが大原因になっていた。どうして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出来ない真に偉大なるものが彼の眼に這入って来るにはまだ大分間があった。

(引用おわり)

終始、客観的に主人公を見ている「道草」は漱石の自伝的小説だと言われている。自分の人生のある時期に起きた出来事を残したものだとするなら、すでにこの小説が新聞連載された大正4年、漱石は48歳。過去の自分を顧みながら、世俗のあれこれに振り回され、遠回りせざるをえなかった実際の生活を、少し離れた視線から笑っているように思える。

義理立てすべき家族親族のつきあいに辟易し、家の中では娘の誕生、妻との仲もお互いに遠慮のない掛け合いをしながらかけがえのない夫婦となってゆく。それぞれの会話から見える健三とお住の心情がとても愛おしく描かれていて、わたしはすっかり「お住＝鏡子さん」のファンになった。

連載当時、きっと鏡子さんはくすくす笑いながら、でもどこかではらはらしながら毎日、新聞を読んでいたろうと思う。そう思うと漱石の家族がうらやましい。悪く書かれている養父や養母や比田さんには気の毒だけど、「ええい知るもんか」と家族をすっかり題材にしたところに、漱石の他の作品とはひと味違う登場人物への愛情があるように思う。

ところで「金の力で支配出来ない真に偉大なるもの」とは。

神の存在を書かない漱石が至ったものは、「自然の道理」なのか。叶うなら細君の立場から見た鏡子さんにその辺りを聞いてみたいと思った。彼女らしい言葉でバツサリ斬ってくれるだろうか。そうだ、次は「漱石の思い出」を読まなくちゃ。

(おわり)

「女の強さ」

多くの子育てを経験した日本人女性がお住に肩入れする。

給料は安い、仕事を家庭に持ち込み、身重の妻に対し労いや感謝の言葉も態度もなくむしろバカにしてくる。子供の面倒も見ない。地位も金もないのに自分を尊敬しろと言う。

ただ、健三の腹違いの姉、縁を切った筈の養父母が金の無心に来てもまるで自分に関係ないと言ったそぶりであるのに強かさを感じる。

他方では官吏を追われ、貴族院に出してやる、事業をやらないか？ だのと騙されて借金を背負う自分の父親を味方する。比田から金を借りてこいとも言う。

その生い立ちから理詰めで人を馬鹿にする健三にも非はあるだろうが、他人を屠る事が出来ないで自分の血液を輸血するが如く心身をすり減らし仕事に打ち込み、人間 ATM と化した彼に同情を覚えた。

そんな夫に構わずに、命がけで産んだ我が子を愛する妻を通して、道徳を表にし、実際は金により繋がる人々の愚かさ、未来ある子供にこそ愛を注ぐべき時代である、というメッセージと私は受け止めた。

想像してみてください。

あなたの元にある日病院から

「親戚の方が入院したけど身寄りがないから緊急連絡先に名前を書かせてくれ、と言っていますがいいですね」と電話がかかってくる。

繋がりは薄いけど名前だけなら、と許可をするとそれ以降事あるごとに病院から呼び出されます。

病院は早く退院してくれと言ってくるが、元々独居の患者本人は後遺症が残りもう1人では暮らせない。

入所できる施設を探そうにも費用が安い所は300人の入所待ち。

忙しい仕事の合間を縫って日用品を届けに面会に行くと、病院はいつ退院させるのか？というプレッシャーをかけてきます。

親の介護、子育て、ダブルケア、貧困問題など現代にも繋がる話だと思いました。

(おわり)

「健三と御住の夫婦は○か×か？」

「道草」を読んだのは初めてだったが、既に前の読書会で勉強した夏目漱石の生い立ちを小説にした話だったので、心にずきんとくるような感動は正直言って起きなかった。

けれども、この作品は、夫婦関係が今までの漱石の作品より詳しく書かれていてよくわかり、私は最後まで面白く読ませてもらった。

健三とお住の関係はとても不思議な関係だと思った。私は、前半を読み終えた時、健三がお住を馬鹿にしたり、きちんと教えてあげない態度に健三は傲慢で優しくない人間だなと思い、御住を可哀想に思った。しかし、この後の50章、51章で、異常な様子を見せた御住を健三がとても心配して声をかけている場面を読んだ時、考えが変わった。健三の普段は見せない御住に対する愛情を私は感じて、彼に対するイメージが良い方に変った。更に、その後の80章でも、御住のお産のために、彼なりに努力している行動に対して、私は益々良い印象を持った。

また、この作品は妻である御住の言動がしっかり書かれている。御住は健三と違って深く考えることは嫌いな性格だが、健三と同じように頑固な性格でもあった。そのために二人はよく衝突した。しかし、離婚の危機が訪れそうになると、健三の隠れた愛情がウルトラマンのように現れて(長くは続きませんが、3分ぐらい?)外れそうになった軌道を元にもどしているように、私は思った。御住もこの健三の愛に気づいていると思う。だから、黙って財布にお金を入れたり、父親への援助を請求したりしないのだと思う。二人はお互いの愛を感じているから、別れないで長い間関係が続いているのだと思った。また、健三が子供に優しくできないのは、自分が子供の時に愛して貰えなかったためであって、妻を含め人間に対して冷たい心の持ち主というわけではなく、むしろ、優しい性格であるから、いつまでもお金をあげてしまったり、関係を切れなかったりするのだと思う。

それから、「道草」という言葉は目的地に行く前に寄り道をして時間を使う意味だが、寄り道は楽しい時間でもある、私は、漱石は、健三と御住が夫婦として一緒に歩む時間は無駄な時間でもあるが、楽しい時間でもあるという意味も込めたのかもしれないと思った。

二人の関係は子供のことに対しては危ういけれども、夫婦としては互いに愛しており、その点からこの夫婦は○だと思います。

(おわり)

『 全然片付かない 』

「自称」車の運転が上手な人の車に乗った際、その人は常にイライラしていた。自分と同じレベルで車が走行していないと頭にくらしかった。初心者もいれば高齢者も運転しているし、ゆっくり曲がる車もある。本当に上手な人は、どんなレベルの環境であれ、安全に運転できる人のことだろう。だから「自称」なのだと思っただけで心の内で思った。学問を究めたために、妻をはじめ周囲の人間を見下してしまう健三に少し重なった。見下してしまう功罪に金の無心を断れなくなるという矛盾を孕んでしまう。以前の義理云々は後付けの言い訳で、自らの帰属意識を保つためでもあろう。

「夫婦は何処まで行っても背中合わせのまま暮らした。」と夫婦関係について健三は述懐しているが、どんな人間関係であれ「背中合わせ」が基本当たり前だと思うのだ。なまじ関係が近いと分かり合えるのが当然だと思いがちだが、個としての人間であれば、それはあり得ない。それは原家族でも親友でも同じだ。だからこそ、近い関係であればあるほど、思いやりやコミュニケーションが必要なのだが健三はそれに気づかない。

妊婦が常に眠たいのを健三は知らない。出産は常々「病気ではない」と言われるがその通りだ。ただ、命がけなだけだ。健三はそれもわからない。もちろん、男女の性差もあり、お互いに理解しえないことだらけだ。何のきらいもなく、お互いに信頼関係を無条件に結べるのは妻と乳飲み子くらいかもしれない。子供ともなれば、幼い健三のように純粋な感情だけではいられない。コミュニケーションが一番必要なのは他人ではなく、家族のように近い関係だ。作者は、健三を通してそのことを俯瞰的に書いているのにも関わらず、現実にはうまくいかない。そこが永遠のテーマたる所以かもしれない。

健三は、親族の金の無心や夫婦関係にしきりに「片付かない」と嘆く。ただ、生きていけばすべてが片付いてスッキリすることはないと年を経れば体感でわかる。「生きる＝片付かない」だ。逆に健三の言う「片付く」とは「死」と同義語のように思う。健三は、その意味では目一杯生きているのかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「義理と人情」

ルース・ベネディクトの『菊と刀』の第七章に日本人の義理に関する分析が描かれている。日本文化の「義理」は道徳規律とは関係がなく、アメリカ人にとっての借金の返済のようなものだとある。

健三は、養父島田から、生家に復籍したとしても、不実不人情なことはしない、という意味のことを書いてある文書を、100円で買い取り、島田から受け取った一歳の義理を返した。

まさしく、ベネディクトのいうように、借金の返済と同じである。義理と人情をお金に換算して精算したのである。

大正時代は、現在のように社会保障のない時代だから、年老いて身よりもなく、収入のなければ、義理と人情をお金に換えて生き延びざるをえない。

財政難の現代日本も社会保障費を削減するために、今後、人間関係がどんどん世知辛くなるだろう。そうすれば、親戚縁者の義理と人情と金の問題が、漱石の描いた大正時代と変わらないようになっていくだろう。

宗族で資産を共同管理する中国と違って、家制度の日本では養子をとって資産を管理していくとベネディクトは解説している。

近代知識人である健三も、前近代的な養子制度、家制度に抗うことは出来ない。その制度のうえに義理と人情という日本人特有の感情が生まれてくるのである。

こう書いてしまうと、あまりにも唯物論的と言うか、下部構造(経済)が上部構造(精神)の問題を規定するというマルクスのテーゼに近くなってしまいが、『道草』は、義理も人情も、結局は金も問題になっていくというシビアな情景を、うんざりするくらいリアルに描いている。

フランスの自然主義の代表的作家、ゾラやモーパッサンの作品では、金が人間関係の基盤になっている近代社会の残酷さが容赦なく展開されていて、読んでいて、救いがない。この作品を書くまで漱石は余裕派などと言われ、フランスの自然主義を御本尊とする一派からは、けなされていたのだが、「俺もこういうのが書けるんだ」という、漱石の矜持を感じさせる。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343